

東北紀行

Tohoku Travelogue

第 69 号 / 2026 年 3 月 / 編集：丸岡泰（石巻専修大学）

復興のツーリズムとしての教育旅行実施を願う 宮城県立支援学校岩沼高等学園 青野也寸志

1 復興のツーリズムとしての教育旅行実施の意義

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災からおよそ 15 年の歳月が経過した。そのような中、災害復興を願う中において探究した結果、教育旅行に辿りつくこととなった。被災地として、特に修学旅行をはじめとした教育旅行において、関係施設訪問等を通しての教育的意義は重要であることについて、研究活動において改めて確認することができた。

2 東日本大震災前の修学旅行文集における記述

2008 年、D 県 B 高等学校（以下「B 高」と表記）の修学旅行（3 泊 4 日）は、最初の訪問先が兵庫県神戸市の「人と防災未来センター」であった。修学旅行後に記述された修学旅行文集において、当時の生徒たちが修学旅行の感想を A4 で 1~2 枚ほど記述していたものを読み込んだ。その際、この「人と防災未来センター」のことも含め、当時、近い将来予想された D 県沖地震のこともあったことも踏まえ、地震等の災害についての記述をしていた生徒が想像よりはるかに少なかったことに強い衝撃を受けた。2024 年 12 月 7 日（土）、大阪成蹊大学（大阪府）において開催された当学会全国大会研究ワークショップにおいて、その調査結果を報告させていただき、参加されていた方々からの反響も大きいものがあった。この B 高の修学旅行において、この「人と防災未来センター」の訪問後、神戸・大阪・京都の修学旅行としての定番となる場所に訪問している。さらには、3 日目は自主研修と称してグループにより、希望する訪問先を訪れている。自主研修も含め、この「人と防災未来センター」以外に災害復興等の関係施設の訪問の記録を確認することができなかった。

2024 年の当学会全国大会後、何度も研究者の方々の意見交換をもとにたどり着いたこととしては、アナログ資料である修学旅行文集のデジタル（Word）テキスト化であった。具体的には、人と防災未来センタ

1 教育旅行等の振り返り⑨

青野「復興のツーリズムとしての教育旅行の考察」はある高校の 2008 年の京都・大阪・神戸旅行で後日作成の文集で訪問先「人と防災未来センター」の記載生徒の比率は約 28% である反面、他の災害被災地の旅行経験の感想文は意義の存在を示すとした。

丸岡 泰、青野也寸志、稲葉雅子、栗林克寛、三橋勇太、高田剛司、大嶋淳俊、柳津英敬、泰松範行「日本観光研究学会 39 回全国大会ワークショップ経過報告—災害後の復興のツーリズムと観光地経営発展段階モデルの一般化を目指して—」【観光研究】2025. 3 / Vol. 36 / No. 2（ジャーナル）日本観光研究学会機関誌 P. 107

1 教育旅行等の振り返り⑩

その一方で、災害被災地訪問を含む修学旅行の経験の効果については十分明らかではないため、本グループでは旅行後作成された高校生の文集の分析を実行中である。阪神・淡路大震災後の神戸への修学旅行後に記された文集では、災害関連への言及が予想ほど多くはなかったと報告されている（青野）。この現象は目的地の併用と関連が深く、精査と検討の意義があると考えられる。

丸岡 泰、青野也寸志、稲葉雅子、栗林克寛、三橋勇太、高田剛司、大嶋淳俊、柳津英敬、泰松範行「復興のツーリズム研究分科会 2 年度経過報告—災害後の復興のツーリズムと観光地経営発展段階モデルの一般化を目指して—」【観光研究】2025. 9 / Vol. 37 / No. 1（ジャーナル）日本観光研究学会機関誌 P. 98

一を含む修学旅行の文集の分析が必要であると考えた。この修学旅行文集を記述した当時の生徒たちは、D 県沖地震（震度 5）は未体験であることや、2000 年代に震度 6 弱前後の地震が何度もあったこと、2011 年 3 月東日本大震災の約 2 年 6 か月前であったこと等も背景として考慮する必要がある。このテキストの分析について、手法等を現在検討中である^(注)。

(注) 修学旅行文集のテキスト化について、石巻専修大学の経営学部教授の丸岡泰先生と学生さんにご協力いただいた。

3 災害復興関連施設についてのフィールドワーク 復興のツーリズムにおける教育旅行に関連する施設

について、文献調査とともにフィールドワークが大変重要であることを認識していたこともあり、特に D 県の中学校の修学旅行先として、圧倒的に多い首都圏に焦点を絞り、ここでは二つの災害復興関連施設について、2025 年 2 月 16 日（日）の訪問経験に基づき、考察していくこととしたい。

(1) 横網町公園管理所（東京都墨田区）

この施設は、関東大震災の災害復興施設として長い歴史があり、戦後は東京大空襲に関する施設としての役割も兼ねている。担当の方にお伺いしてみたところ「（小学校・中学校・高等学校等における）修学旅行での利用は多数ある現状」とのことであり、都内の中心部にありながら敷地が大変広いこともあり、「修学旅行において、大型バスの発着も十分可能」とのことであった。D 県の中学生は、高等学校等を卒業後、進学や就職において首都圏に居住する方々も少なくないとともに、日本国内すべての地域において、災害等のリスクを抱えている現状も含め、ぜひとも、教育旅行の訪問先として意義あるといえる。

この施設に関する先行研究レビューをしたところ、かなりの学術論文等が公表されており、数多くの

論文を拝読することができた。例えば、姜明采（2019）をはじめ、姜明采氏は具体的に多数公表されている。また、観光まちづくりとの関連について考察している論文として、丸岡（2024）がある。

姜明采（2019）「震災記念堂を中心に計画された横網町公園の建造物に関する研究 —「日本趣味」の建築の成立過程について—」神奈川大学博士論文

丸岡泰（2024）「東京都慰霊堂・復興記念館の伝承と観光まちづくりの現状」石巻専修大学経営学研究 36

(2) そなエリア東京（東京都江東区）

この施設は、首都直下型地震等の災害が起こった場合、本部機能を担うよう設計されている施設である。公式ホームページの内容の一部を引用すると、「そなエリア東京は、地震災害後の支援が少ない時間を生き抜く知恵を学ぶ防災体験学習ツアー「東京直下 72hTOUR」を中心とした防災体験学習施設です。被災地や避難所の様子を再現した実物大のジオラマ展示がごさいます。首都直下地震について、なぜ起きるのか？いつ、どのような被害想定なのかを紹介する首都直下地震特設コーナー、地震発生後生き抜くヒントや備えたいグッズの紹介もごさいます。また、首都直下地震発生時に緊急災害現地対策本部の候補地となるオペレーションルームも見学窓からご覧いただけます。」^(注)と掲載されているとともに、東日本大震災等の内容もかなり展示されており、東北地方の施設のような力の入れようである。訪問時は、日曜日ということもあり、家族連れが多く、自分ごとで意識を高める様子がいたるところで見られた。

(注) 東京臨海広域防災公園管理センター公式ホームページ

<https://www.tokyorinkai-koen.jp/sonaarea/>（2026 年 1 月 12 日閲覧）



事務所

①東京都復興記念館



②東京都慰霊堂



付記：この研究論文は、青野也寸志（2025）「復興のツーリズムからの観光教育についての一考察 —今後の研究計画、特に首都圏の教育旅行施設等に焦点をあてて—」2025 年度日本観光研究学会東北支部研究会の内容が一部含まれていることを申し添えます。